

平成24年度 公益財団法人大阪市博物館協会の事業評価

大阪市立美術館の運営状況（総括）【シート3】

H23年度を中心とする指定管理期間の自己評価			外部評価 ≪ 委員コメント総括 ≫
事業区分	重点目標	詳細	
1 資料の収集、保存、活用	収蔵環境の維持	南収蔵庫前室の燻蒸を平成23年12月に実施し、防虫、防黴の徹底を図り、収蔵庫の環境の維持に努めた。	<ul style="list-style-type: none"> ・収蔵庫の環境維持に努力していることを評価する。今後も計画的に進めてほしい。 ・収蔵庫のみならず、大阪市立美術館の建築自体が老朽化しているため、総合的な視点からの抜本的な対策が求められる。その際、建築の歴史的な意義と周辺環境に果たしてきた役割を十分に踏まえることが望ましい。収蔵環境の低下については、外部の保存修復の専門家も交えて常に細心の注意を払い、迅速適切な対応をとってほしい。 ・良質な個人コレクションの寄贈が多いというのは大阪市立美術館というより大阪の強みである。美術館が積み上げてきた歴史と信用の賜物であり、今後さらに、これらを様々な方面で積極的に活用してほしい。
	収蔵環境の改善	北収蔵庫の密閉度が構造上の問題と経年劣化とによって低下してきたため、平成24年1～2月に改修した。	
	作品の寄贈と寄託品の収集	鍋島焼118点の寄贈を受けて手続きを進め、特別陳列の受贈記念展も実施した。鍋島焼によるこの田原コレクションは、当館の陶磁器分野の中心的な館蔵品とすることができた。また、中国工芸の一括寄託を受け入れることができ、1～2月の特別陳列でその一部を紹介した。	
2 調査・研究	館蔵品・寄託品の整理・調査・基礎資料の作成・研究	インターン研修の一環として、蓮昇寺から一括で寄託を受けた陶磁器・漆器の基礎データを作成できた。	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎データを作成できたことを高く評価する。データの作成は地味だが大切な作業であり、できれば持続的に進めてほしい。 ・「生誕120周年記念 岸田劉生展」(23年度)は内容の質と量において近年の劉生展の中では群を抜いていた。学芸員の事前の調査研究の賜物。研究成果の広く一般への公開という意味でも評価に値する。 ・紀要は、地味ではあるが、図録と並んで数少ない研究成果発表の場であるので、ぜひ活用してほしい。またその具体的な内容については、できれば美術館のHPで書誌情報及び概要がわかるようにしてほしい。
	特別展を中心とした美術作品の調査・研究	「岸田劉生展」において、一括で拝借を希望する個人コレクションの調査・研究を実施し、特別展の質の向上に資することができた。	
	研究紀要の発行	展覧会開催にかかる研究の成果や恒常的な研究成果の発表の場として紀要を発行しているが、平成23年度末に研究紀要12号を発刊出来た(研究論文「磁州窯系陶器の施文技法に関する試論」、「大阪と漆工」)	
3 展示(常設展示、特別展)、来館者サービス	大型の寄贈作品(コレクション)に対する展覧会の開催	平成23年8月2日(火)～9月4日(日)に特別陳列「田原コレクション受贈記念 色鍋島・藍鍋島」を開催。ポスター・チラシ・所蔵品図録も作成し、約5,000人の来館者を迎え好評であった。	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪には高い志を持つ個人コレクターがいたし、今もいるということを示すことは、何かと話題になる大阪のイメージを変えていく上で大きな効果を持つ。今後とも、コレクター列伝としてシリーズ化して展示、出版を展開する方向で考えていただきたい。また、まとまった寄贈を受けた場合には、展覧会を実施し、きちんとした図録を制作することを基本にして対応することを今後も維持してほしい。 ・素人がみても分かるように優しく、短く。また単なる作家論や作品論にとどまらず、背景の文化や歴史にも目配りをしてほしい。図録やHPなど、メディアの特徴を活かして柔軟に書き分ける必要もあるだろう。また平常点(常設展)については、企画意図をわかりやすく説明してほしい。 ・LED照明の導入等による展示環境の改善を高く評価する。展示室以外の空間は極力明るくしてもいいのではないかな。 ・学芸スタッフが少ない一方、作業量は多岐にわたり、かつ膨大なために、館蔵コレクションの活用が十分なされていない。大規模特別展の際の常設展の在り方、学芸員の負担を減らす工夫、展示内容の観客への広報について、抜本的な検討が望まれる。
	展示解説の充実	常設展「中国書画I・II」、「仏教美術I・II」で各展示室ごとにわかりやすい展示パネルを作成。展示内容の概略がわかりやすいと好評であった。	
	展示環境の改善	北館2階壁面ケース、南館1階移動ケース、南館2階ガラスファイバー等にLED照明を導入でき、色鮮やかで効果的な展示ができるようになった。	
4 教育普及、学習支援、友の会、ボランティア	特別展における記念講演会の実施	特別展「歌川国芳展」、「岸田劉生展」において、展覧会の内容理解の促進のために記念講演会を実施した。外部講師と共に当館学芸員も展覧会にかかる成果を市民に講演し紹介した。アンケート等でも好評であった。	<ul style="list-style-type: none"> ・格差社会といわれる中で、いま求められているのは、だれもが利用できる「居場所」の確保であろう。とくに格差が大きいと言われる大阪では重要である。美術館、博物館はそうした居場所としての役割も求められている。こうした流れに沿った努力が望まれる。天王寺公園の入場料などの問題も再考が必要であろう。土日は行けば必ず何かやっつて、というのが理想である。定例化している事業もあるので、今後さらに力を入れてほしい。 ・リピーターを確保する上で有意義な事業である。友の会による自主的な活動も含めて、一層拡充してほしい。美術館への愛着や帰属意識をはぐくむ上で、効果的と思われる。 ・子どものころよく甲子園に行った、という感覚で子どもに気軽に美術館に親しんでもらうのは、潜在ファンの開拓、地域の絆の回復、ひいては治安の向上と多くの面で極めて有効である。高校生や大学生など美術館にあまり足を運ばない層にも目配りをしてほしい。また、事業の企画・運営に当たっては、他館の経験や全国美術館会議教育普及研究部会の蓄積なども参考になるのではないかな。
	友の会限定の教育普及事業の実施	友の会という美術愛好家向けの教育普及事業として、夏に開催した特別陳列「田原コレクション受贈記念 色鍋島・藍鍋島」に際して鍋島焼の美術講座を実施した。	
	「美術館に行こう」事業の実施	小中学生が美術に興味を持つとともに、美術館に親しみを持ってもらうために、プロの画家・彫刻家による実技指導を夏休みに2回実施し、計45名の参加者があった。参加者には好評であり、美術館に興味を持ってもらった。	
5 学校等との利用促進、学校教育支援	博物館学における大学との連携事業	美術館が主催する公募展、全関西美術展の受付・審査・陳列などの一連の展覧会業務を中心に、近畿周辺の大学から約50名の大学生を受け入れて博物館実習を実施した。	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪市立美術館の潜在的なファンを掘り起こすという意味でも、この種の大学との連携は重要である。ただ、どの程度の人数を受け入れるかについては検討が必要である。 ・子どものころから親しんだマイ・ミュージアム、という意識を醸成することが望ましい。その意味では、「教育支援」という上から目線ではなく、来ていただいてナンボ、いわば「毎度おおきに」という意識が必要ではないかな。活動の具体的な内容を、HP等で画像とともに積極的に紹介してほしい。 ・有意義な事業なので、現場に負担が掛かりすぎない範囲で行ってほしい。 ・キャンパス・メンバーズの増員などにより、大学生の利用の増加を図ってほしい。
	小中学校の鑑賞事業に連携して実施。	特別展「岸田劉生」において、小学校の美術教諭による図画工作研究会と連携して鑑賞学習事業を実施し、あわせて美術教諭と学芸員(今回は館長)による公開鑑賞授業を実施した。	
	美術史にかかる大学との連携事業	大学の美術史講座の出講依頼を受けて実施。平成23年度は龍谷大学で1講座半期間実施した。	

6 広報・宣伝、 情報公開と発信	近隣商業施設との連携	新しく開店した大規模商業施設であるキューズモールをはじめとして、近隣商店街との相互の施設利用の割引などの連携を行った。	<ul style="list-style-type: none"> ・阿倍野地区の再開発により、いろいろ協力が打診されているようであるので、地元の商業施設と積極的に連携して相乗効果を上げてほしい。 ・駅と美術館との間にかなりの距離があり、その間のアプローチが単調である。天王寺公園、慶沢園等と一体感を持てるように整備すべきでないか。 ・外国人が宿泊するスポット、よく行く場所等を更に開拓し、効果的な広報を行ってほしい。また、HPを多言語化(英語、中国語、ハングル)することにも努力してほしい。(福岡アジア美術館のHPを参照されたい)外国人は常設展(平常展)を見に来るのではないか。期待に応える広報が必要である。 ・来館者とのやりとりを掲載することは美術館と来館者の信頼感を高める上で重要なことであるが、学芸員の専門分野や研究業績、研究内容などを美術館HPで公開することも重要ではないか。
	外国人向け広報	天王寺都ホテルをはじめ近隣のホテルへの各国語のパンフレットを設置し、外国人及びビジターへの広報が進んだ。	
	情報公開の拡充	来館者の声及び館の回答を1階ロビーに公表(1カ月単位)し、情報公開の充実に努めた。	
7 地域、市民、 関連機関との連携・交流	マスコミとの連携強化	特別展「歌川国芳」の大阪展において、日本経済新聞社と毎日新聞社との共同主催を大阪市立美術館の斡旋によって実現させた。それぞれの社風を超えた協働の有り方を図ることができ、充実した広報を展開することもでき、多くの来館者を得ることができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館としてマスコミとの連携をどのように図るかは館の運営にとって極めて重要なことであるが、学芸スタッフが個人のレベルで新聞、テレビ各社の事業部はもとより、文化部の記者とのパイプを築いておくことも大切である。 ・若手で発表の場を求めている音楽家の協力を得て、ジャズ、クラシック、民族音楽などの無料コンサートを最低月一回行い、祝祭的な雰囲気や醸成し、交流の場とする。(世田谷美術館のプロムナード・コンサートが好例) ただし出演者選考は専門家による助言が必要である。地元との結びつきを強めるためにも定例化が望ましい。(人手不足の中で本当に美術以外の活動ができるのであろうか)
	地域との交流	浪速区の新世界商店街地区を活動拠点にするNPO法人と共催してジャズコンサートを美術館で実施し、地域と連携したイベントの開催ができるようになった。	
	社会活動への貢献	三菱商事(株)によるボランティア活動との共催により、障害者の美術鑑賞会を実施し、社会活動に貢献できた。	
8 施設の整備、 維持管理、リスク マネジメント	展示ケース等の照明のLED化	北館2階壁面ケース、南館1階移動ケース、南館2階ガラスファイバー等にLED照明を導入することができ、色鮮やかで効果的な展示ができるようになった。	<ul style="list-style-type: none"> ・LED照明の導入等による展示環境の改善を高く評価する。 ・重要な作品を多数所蔵している美術館だけに、収蔵庫の改修が進んだことを評価する。震災時の避難者、職員、作品などの安全確保も視野に入れて、対策は定期的に再点検してほしい。
	北収蔵庫の改修	空調上の密閉度の向上により、安定した温度・湿度の維持と管理が可能となった。	
9 運営・マネー ジメント	効果的・効率的な運営	施設担当係長1名の設置を行い、より充実した施設の保守管理ができるようになった。また、任期付き学芸員1名の補充により、当該分野の調査研究をはかり、当該分野の作品に対して充実した管理および展示ができるようになった。	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館の規模、博物館資料に古美術品が多いこと、展示替えや特別展等の実施状況を勘案すれば、7人の学芸員の業務負担は大きく、多くの展覧会から講演、博物館実習、さらには紀要の刊行までカヴァーするのはもはや限界と思われる。この辺、施設設置者(大阪市)も含めて抜本的な対策を練る必要がある。経費節減の要請は分かるが、要員の確保に努めるべきだろう。それが不可能ならば、美術館の使命と事業内容を絞ることも視野に入れるべきであろう。 ・子どもの料金は低く抑えて、ファミリー層が来やすい設定にするというのはいかがでしょうか。一方、65歳以上の有料化については、若い世代からの肯定的な意見もある。 ・利用権の公平性が確保されていることは、市民との信頼関係を構築する上で極めて重要なことである。多様な美術団体が公平に使用できるように改善を重ねてほしい。(利用規定の改定が26年度よりなされることになっている) ・大阪市政の問題であるが、天王寺公園・慶沢園を含んだ周辺整備により、この地域の文化価値を高めることができるのではないか。その中でレストランやカフェ、売店についても地区にふさわしいものに整備することを是非検討してほしい。
	特別展の効果的な観覧料の確保	マスコミなどの民間企業も出資する特別展の観覧料について、大阪市内在住65歳以上の市民に対する有料化を平成24年4月から実施するとともに、市民への周知に努めた。	
	地下展覧会室の公平性の高い運用	地下展覧会室の使用要綱を見直して、さまざまな美術団体が新規に使用ができるような改正案を作成し、実施に向けて条件等の整備をはかった。	
10 α ※各館の特性が できるように、この 項目を活用する。	美術を通じた国際交流	中国の香港芸術館から当館所蔵阿部コレクションの展覧の依頼があり、双方で企画内容を協議し、作品の状態確認を通じて出品選定などを行い、宋・元・明代の作品に絞り込んで、38点の作品を出品することとし、次年度の展覧会として企画することができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・海外の美術館と共同で企画内容を協議したのは素晴らしい。今後も国際交流を学芸員を始め職員の経験と知識が深まる機会としてとらえて、積極的に対応してほしい。具体的には、作品貸出、企画展準備など、あらゆる機会を利用してとくに学芸員の海外研修の機会を増やすことを要望する。 ・大阪市立美術館の存在感は大きい。天王寺地区が変貌している今こそ、経営資源、広報、社会連携など多様な側面に目配りをして、美術館の総合的な戦略を積極的に打ちだしてほしい。